

# 護法

一名

名取  
姫

世阿弥作

ワキ 山伏

ヲカシ 里人

シテ 名取姫

ツレ 里女

ツレ 護法善神

地は 陸奥

季は 雑

「是は本山三熊野の客僧にて候。我此度松島平泉への志有るにより。御暇乞のために本宮証誠殿に通夜申して候へば。あらたに霊夢を蒙りて候。汝奥へ下らば言伝すべし。陸奥名取の里に。名取の老女とて年久しき巫あり。彼者若くさかなりし時は。年詣せしかども。今は年たけ行歩も叶はねば参る事もなし。ゆかしくこそ思へ。是なる物を届けよと具に承り。夢さめて枕を見れば柳の葉に虫

くひの歌あり。是を持ちて只今陸奥へと急ぎ候。雲水の。行方も遠き東路に。く。今日思ひ立つ旅衣。袖の篠懸露結ぶ。草の枕の夜なくに。仮寐の夢を陸奥の。名取の里に着きにけり。く。詞「急ぎ候ふ程に。陸奥名取の里に着きて候。此処にて名取の老女の在所を尋ね申さうずるにて候。在所の人の渡り候ふか。

「何事を御尋ね候ふぞ。

ワキ 「此処に名取の老女と申す人の御座候ふか。

ヲカシ 「さん候御在所はあれに見えたる処にて候。 是に三  
熊野を勧請申されて。 毎日御参り候ふが。 今日  
未だ御参りなく候。 只今是へ御参り候ふべし暫く  
御待ち候ひて。 是にて逢ひ申され候へ。

ワキ 「あら嬉しやさらば是に待ち申し候ふべし。

シテ、ツレ一声 「何くにも。 崇めば神は宿木の。 御影を頼む心かな。

サシ 「是は陸奥に名取の老女とて。 年久しき巫にて候。

二人 「我幼かりし時よりも。 他生の縁もや積りけん。 神

に頼みを掛卷も。 忝しと神職に。 仕ふる心浅から  
ず。 身はさくさめの年詣。 遠きも近き頼みかな。

シテ 「されども次第に年老いて。 遠き歩みも叶はねば。

二人 「かの三熊野を勧請申し。 こゝをさながら紀の国の。  
下歌 「牟婁の郡や音無の。 変はらぬ誓ひぞと。 頼む心ぞ  
誠なる。

上歌 「こゝは名を得て陸奥の。 く。 名取の川の川上を。

音無川と名づけつゝ。 柳の葉守の神こゝに。 証誠  
殿と崇めつゝ。 年詣で日詣でに。 歩みを運ぶ乙女  
子が。 年も旧りぬる宮柱。 立居隙なき宮仕かな。  
く。

ワキ詞

「如何に是なる人に尋ぬべき事の候。

ツレ

「何事にて候ふぞ。

ワキ

「承り及びたる名取の老女と申し候ふは此御事にて  
御座候ふか。

ツレ

「さん候是こそ名取の老女にて御座候へ。 何の為め  
に御尋ね御座候ふぞ。

ワキ

「是は三熊野より出でたる客僧にて候ふが。 老女の  
御目に懸り候ひて申し度き事の候。

ツレ

「暫く御待ち候へ。 其由を申さうずるにて候。 如何  
に老女へ申し候。 是に三熊野より御出で候ふ山伏  
の御座候ふが。 御目に懸り度き由を仰せられ候。

シテ

「あら思ひ寄らずや此方へと申し候へ。

ツレ「此方へ御出で候へ。

シテ「三熊野よりの客僧は何くに御入り候ふぞ。

ワキ「是に候。何とやらん粗忽なるやうに思召し候はん  
ずれども。夢想のやうを申さん為めにて候。さて  
も我此度松島平泉への志あるにより。御暇乞のた  
めに本宮証誠殿に通夜申して候へば。新に御霊夢  
を蒙りて候。汝奥へ下らば言伝すべし。陸奥名取  
の里にて。名取の老女とて年久しき巫あり。彼若

くさかなりし時は年詣でせしかども。今は年老  
い行歩も叶はねば参る事もなし。ゆかしくこそ思  
へ。是なる物をたしかに届けよと新に承りて夢覚  
め枕を見れば。榊の葉に虫喰の御歌あり。有難く  
思ひ是まで遙々持ちて参りて候。是々御覧候へ。

シテ「有難しとも中々に。えぞ岩代の結松。露の命のな  
がらへて。かゝる奇特を拝む事の有難さよ。

詞「老眼にて虫喰の文字さだかならず。それにて高ら

かに遊ばされ候へ。

ワキ 「さらば読みて聞かせ候ふべし。 何々虫喰の御歌は。  
道遠し年もやうく老いにけり。 思ひおこせよ我  
も忘れじ。

シテ 「何なふ道遠し。 年もやうく老いにけり。 思ひお  
こせよ我も忘れじ。

ワキ 「げにく御感涙尤にて候去りながら。 二世の願望  
あらはれて羨ましくこそ候へ。

シテ 「仰せの如くかほどまで。 受けられ申す神慮なれば。  
崇めても猶有難し。

ワキ 「二世の願ひや三つの御山を。 移して祝ふ神なれば。  
シテ 「こゝも熊野の岩田川。 深き心の奥までも。

ワキ 「受けられ申す神慮とて。 思ひおこせよ。  
シテ 「我も忘れじとは。

地 「有難しく。 げにや末世と言ひながら。 神の誓ひ  
は疑ひも。 柵の葉に。 見し神歌は有難や。

シテ「如何に客僧へ申し候。此処に三熊野の勧請申して候ふ御参り候へ。」

ワキ「やがて御供申し候ふべし。」

シテ「御覧候へ此御山の有様。何となく本宮に似参らせ候ふ程に。本宮証誠殿と崇め申し候。又あれに見えたるは飛鳥の里。新宮と祝ひ参らせ候。又此方に滝の落ち候ふをば。」

カハル「名にしおふ飛龍権現のおはします。那智の御山と

こそ崇め申し候へ。」

クリ地「それ勧請の神所。国家に於て其数ありといへども。取り分き当社の御来歴。りよしんを以て専とせり。」

サシ「もとは摩伽陀国のあるじとして。御代を治め国家を守り。」

地「大悲の海深うして。万民無縁の御影を受けて。日月の波静なり。」

シテ「然りとは申せども。猶も和光の御結縁。」

地「あまねき雨の足引の。大和島根に移りまして。此  
秋津神となり給ふ。

クセ「処は紀の国や。牟婁の郡に宮居して。行人征馬の。  
歩みを運ぶ志。直なる道となりしより。四海波静  
にて。八天塵をさまれり。中にも本宮や。証誠殿  
と申すは。本地弥陀にてましませば。十方界に示  
現して。光り普き御誓ひ。頼むべし頼むべしや。  
程も遙けき陸奥の。東の国の奥よりも。南の果に

歩みして。終には西方の。台になどか座せざらん。

シテ「大悲擁護の霞は。

地「熊野山の嶺に棚引き。靈験無双の神明は。音無川  
の川風の。声は万歳が峰の松の。千とせの坂既に。  
六十に至る陸奥の。名取の老女かくばかり。受け  
られ申す神心。げに信あれば徳ありや。有難し有  
難き。告ぞめでたかりける。

ワキ「老女へ申し候。かゝるめでたき神慮にて御座候ふ



に。臨時の幣帛を捧げて神慮をすゝしめ御申し候へ。

シテ「げにく臨時の幣帛を捧げて。神慮をすゝしめ参らせうずるにて候。

カル「いでく臨時の幣帛を捧げ。神慮をすゝしめ申さん。

ワキ「天の羽袖や白木綿花。

シテ「神前に捧げ諸共に。

二人「謹上再拝。仰ぎ願はくは棹鹿の。八つの御耳を振り立て。利生の御翅を並べ。空海の空に翔りては。

一天泰平国土安全。諸人快樂福寿円満の。恵みを普く施し給へや。南無三所権現。護法善神。

シテ「不思議やな老女が捧ぐる幣帛の上に。化したる人の虚空に翔り。老女が頭を撫で給ふは。如何なる人にてましますぞ。

護法「事も愚や権現の御使。護法善神よ。

シテ「有難や。まのあたりなる御相好。

護法「神は宜禰がならひを受け。

地「人は神の徳を知るべしとて。参りの道には。

護法「むかひ護法の先達となり。

地「さて又下向の道に出づれば。

護法「国々までも送り護法。

地「災難を遁し悪魔を払ふ。送り迎ひの護法善神なり。それ我国は小国なりと申せども。大神光りを

さしおろし給ふ。其矛のしたゝりに。大日の文字。あらはれ給ひしより。大日の本国と号して。胎金

両部の密教たり。

護法「然ればもとよりも。

地「然ればもとよりも。日本第一大靈験。熊野三所権現と現はれて。衆生済度の。方便を貯へて。発心の門を出で。岩田川の波を分けて。煩惱の垢をすげば。水のまにく道をつけて。危き崖路の苔を

走れば。下にも行くや足早舟の。波の打櫂水馴棹。  
下ればさし上れば引く。綱手も三葉柏に。かく神  
託の道は遠し。年は旧りぬる名取の老女が。子孫  
に至るまで。二世の願望三世の所望。皆悉く願成  
就の。神託あらたに告げ知らせて。護法は上らせ  
給ひけり。